

實
年
原
香
紋

二
海
新
海

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100







紫式部代話
根源實紫
初編
仙果編述
豊國畫

根源實武初編

笠亭仙果作
一陽齋豐國画

芝神明前
佐野屋發販



於藤作之本故武藏野に草造紙其縁者と
稱るべけれも哀と人の愛て漆色ある紫も江戸名物の
随一と

そのねねも又其源乃光源氏の物語昔作り式部れ傳記
知まりやとゆりかる幼子達とわくと聞て彼女房の

一代話例の合巻に物せよと也猶同くいつものと違ひ實録のまじり
る昔れ賢女の行状も知る些々教の端も知らんと實それも
道理

おぼやも既在下足利館の八編にも書如く似て非なる物ありて
人の悦び者給つに虚い面白く實ハ興浅し加之古書籍觀る力と

おれ聞取傍問へんおれ紫式部の生年も没年も其
實名も未知しに唯彼人の日記二冊ふ客餘心術自然ふ



微細見ぬれ大方斯りや有つんと十五ハ推量の憶度とて
あつたまふ外題に實と嘆ども實らき虚あるは猶それ
興々
深々に繪様もたゞま随へる穂和をに珍しき
節のりれども是も亦藤に有縁の龜戸乃名筆外に

まねてのあきと方小先一袋二枚喜鶴堂に稿を贈る鳴呼赤木城
紫色に涼改一先師の餘光僕等ふすそ及べる我と追善心小卒都婆
の詠歌
家の集より鈔出小所に縁の世喜寺小拙筆と起るもの
嘉永五年壬子閏春 東都浅草 笠亭仙果



鳥帽子袴衣緋の袴ハ踊れ外ハ画にむきても幼兒の目と慰めねハ月代刺と攝政
関白片外ハの内侍命婦其趣意ハ年ぬるても大事なりと車も衆物とに添ふもろ



藤原為時女式部里の樣

めの子
に 女童
や
寄生
木

一、條院天皇の

中宮彰子

中宮ハ

御本

あり妻

家集

心づくに

五

身也

かあふそ

此書

五

五

1

女童

式部丞 父為時

中宮

れハ
姓
氏

上

七

式ア

たり

公世子

以前の名

のまごめ

野人作

設人

ありき

きくら
るる

五

の

よう

to
tutu

卷之六

父

卷之四

香

女郎花 式部

さくらさくらを
ふりふり
あつたきやう
こまや
しるる

あ
は
れ
の
こ
ろ
の
あ
や
そ
の
そ
の
そ
の

御堂殿



攝政大臣

藤原道長公

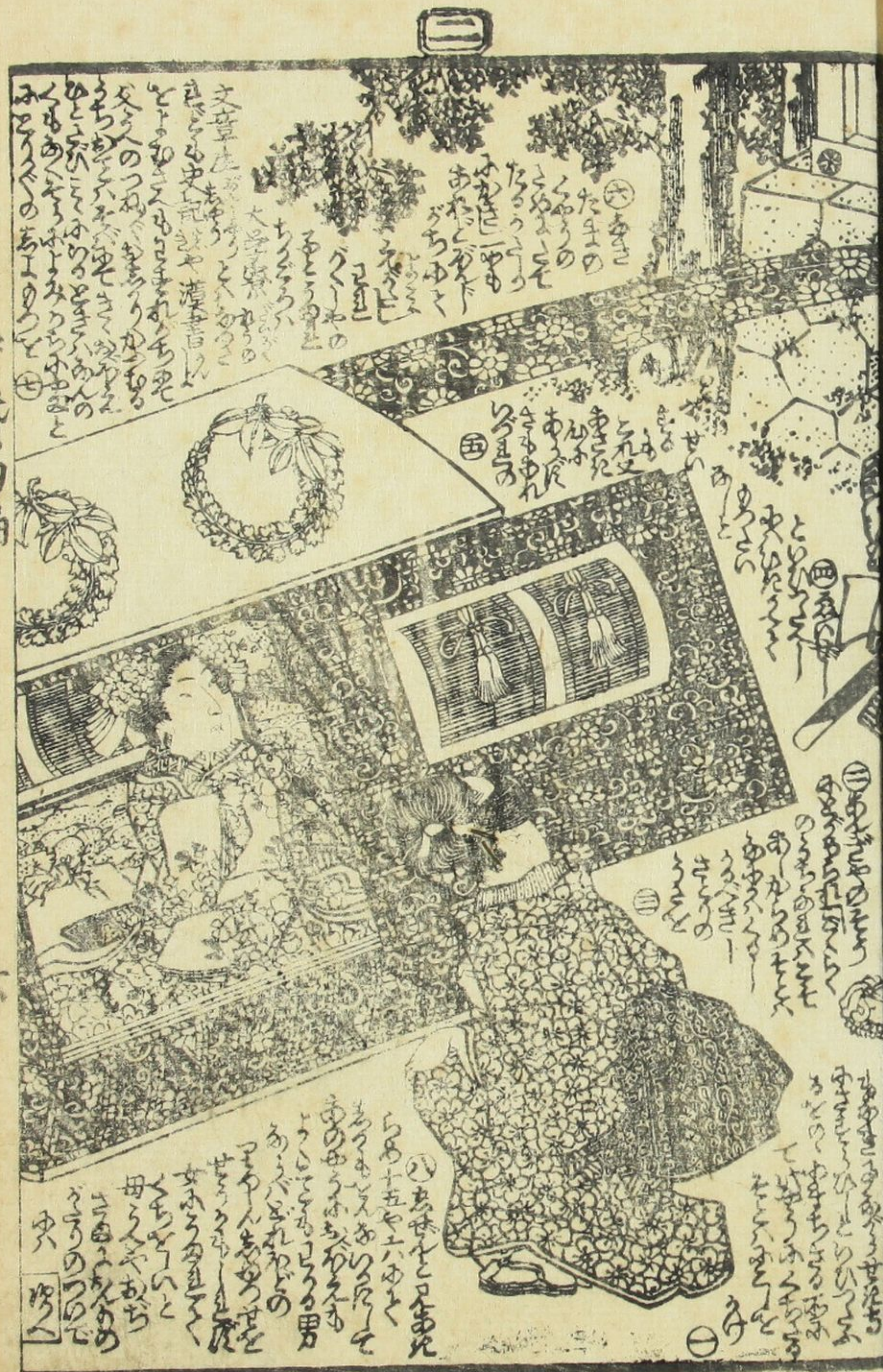
俗
御堂關白と
申し

右衛門權佐宣孝女

賢子
後大貳三位と呼ん

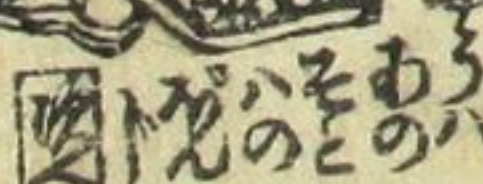






— 11 —

又さういふと、おちのちのちねのちね
 ようきもあつた、おちのちのちねのちね
 まゝおちのちのちねのちねのちね
 せえでうのちねのちねのちねのちね
 かゝると、おちのちのちねのちねのちね
 いひひひひひひひひひひひひひひひひ
 ておちのちのちねのちねのちねのちね
 つつと、おちのちのちねのちねのちね
 おちのちのちねのちねのちねのちね
 あんや、おちのちのちねのちねのちね



御膳手紙

① 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

② 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

③ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

④ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑤ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑥ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑦ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑧ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑨ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑩ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑪ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑫ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑬ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑭ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の

⑮ 藤原氏 藤原氏を二部に分けて
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の
元弘元年の乱の際に藤原氏の



御膳手紙

豊
田

仙果作



初編下

芝三島町
喜鶴堂





新刊

江戸文庫

三つさき
ち先純
まねの
せし
やまの
あつ
さく
きん
たう
と輝

實業初編

づき へびごうのくぬぐ板えんふあへさきてききうらん
 よそあはれたるもありのちかぢひわするもあつ
 みあなりくへきあもぐあうそのあふりなのたがをう
 さいやにきまひあむあをたえふじあきてあつ甘んはさへ
 むうひまをあのをそをさきうつまをさきわねちち
 あじくさんあのをさきうかへちあひわうろそ
 あやうさきへんえんらんともみづるそのあええよ
 るるやうあつらふううてをうあきさこのある
 はさむうさきさきわねくこへんああさうあひるある
 名僧あやうさきあかあうさかあやうあうあひるある
 りあうのさうつあきあねともわあひのあえたとえへ
 へあひあやうにこそあうあてあひあもあひあう
 ようてきうあひあかあひあう

[illegible]

いそろそにあり

しるしの
こまぢい

世のたき

と云ふ人

上

40

上

三

正
の

五

聖人

うけと

三

三ノ

やうねんとか

中々を

孝子方子海

毛子子子子子

とくなくも

上六

小

のそま

のちのち
とまへ

上卷

とあるは

この石を

此は東人
の三子なり

おてそふ

卷之四

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a vertical crease down the center. There is a small, dark, irregular stain near the bottom center of the page. The edges of the page are slightly darker, suggesting age and handling.

卷之四

〇のちのち
 ねづみ
 かろく
 ちとけの
 ちとけ
 ありさ
 いやま
 とちとけ

わんごあたまを首元の袂にさぐりあつておれん
ものゝとてうらなひあるかなとせんとすめといそそ
早く甘きついで月とえわさるる海にうそとくろとこ
ゆきとていといとくまよらふあまゆめといそそのはるき
いかなうもあたまを首元の袂にさぐりあつてまき
やあやむめを首元の袂にさぐりあつてまきの
まきとていそあひいひはく。いそあひのわじ
みはまきとていそあひいひはく。いそあひのわじ
そとあつて

人の名をいふ可き名を
 あのかさきまうあや
 まやうはふゆれのそ
 ぢよゆあきまそ
 トをよれば
 そむくのわ
 こもすけり
 とむくあやう文章
 生はけうふあや
 られあやうの
 たあとさきあきま
 とくわそのうとふ
 なあきまあきま
 あきまあきま
 とれあきま
 とれあきま

寶鑑

卷之四

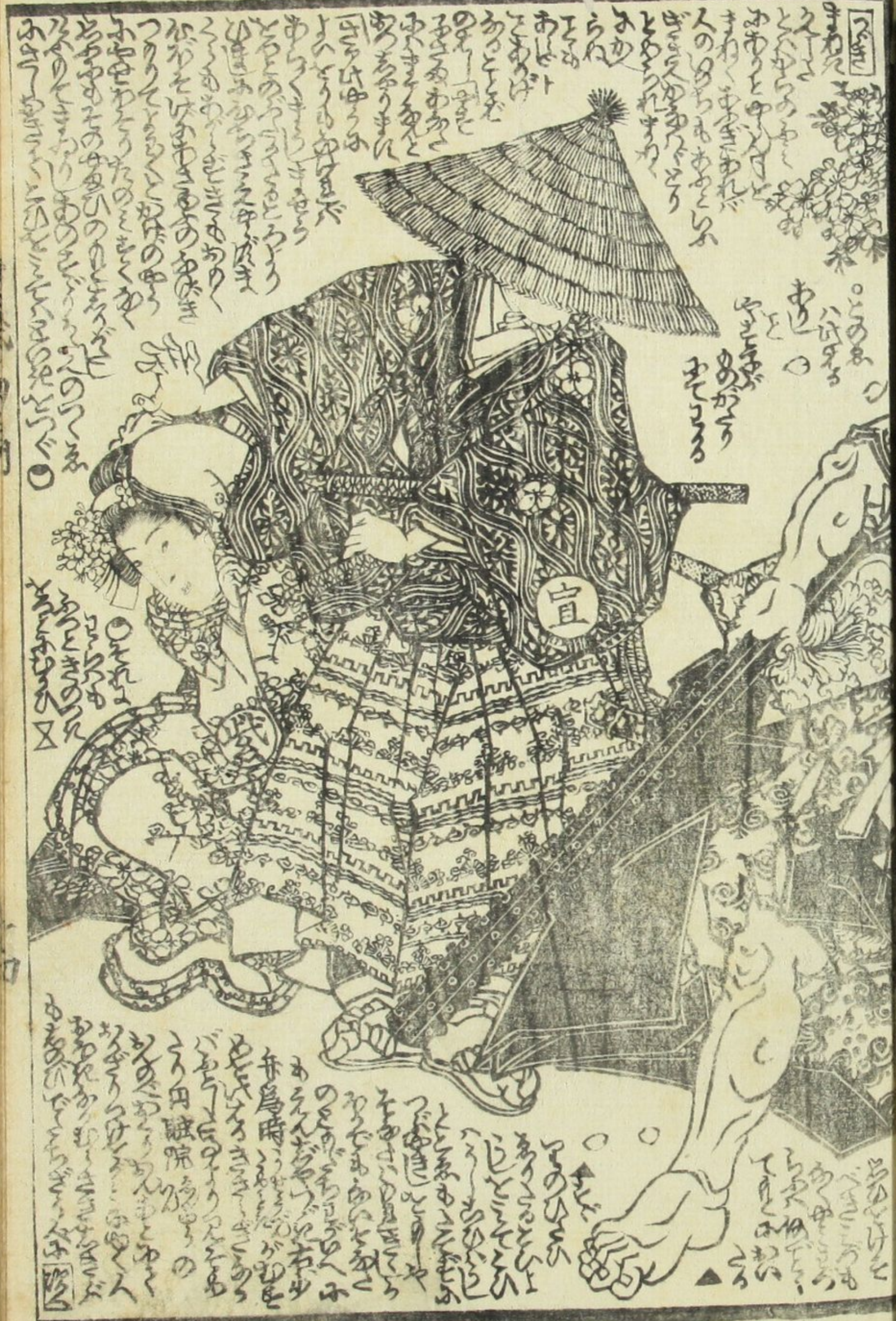
袴出保輔

實業不給

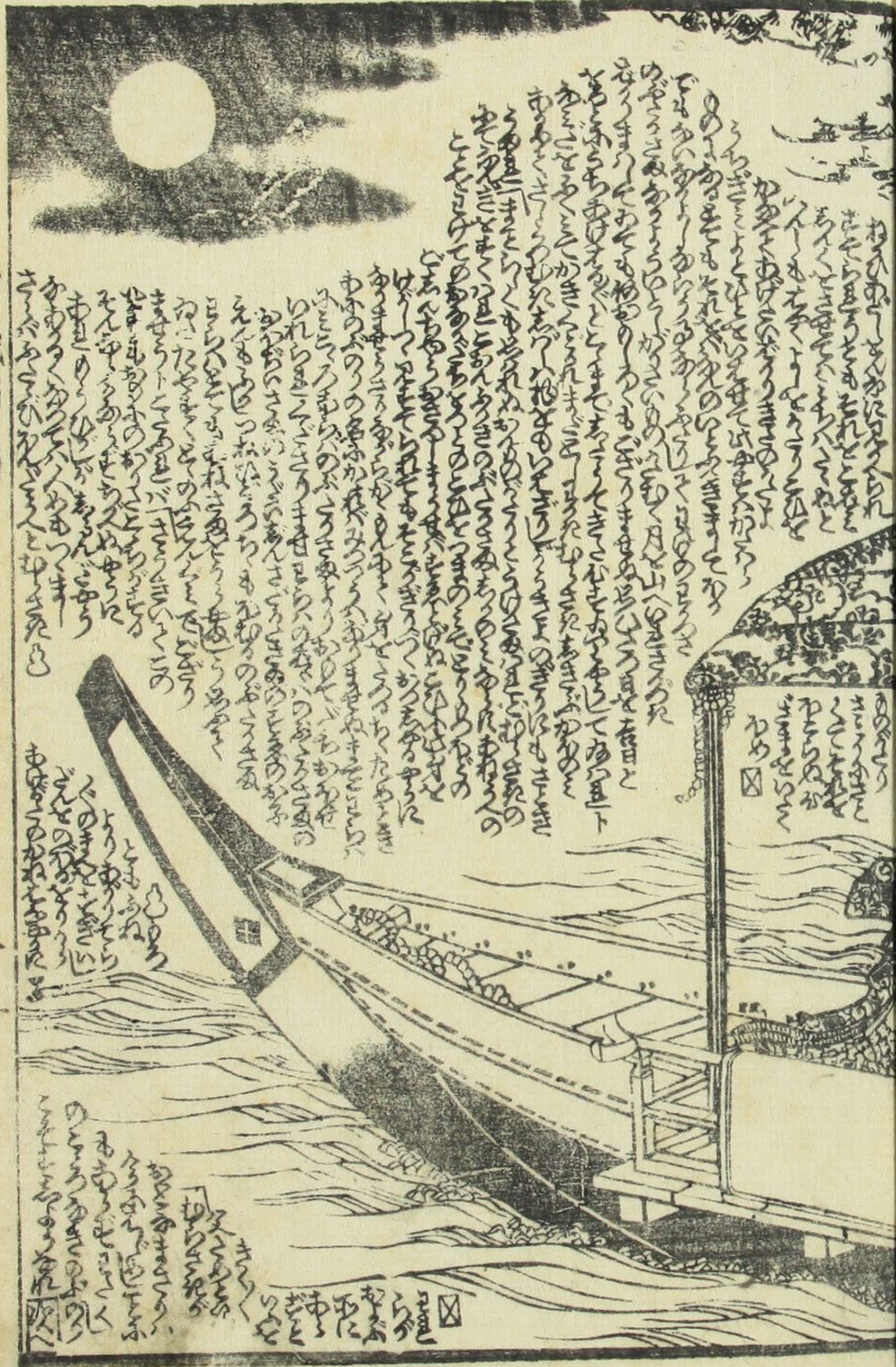
十三



坂田公時



宣



月夜の静けさ
舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜
舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜

舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜
舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜



静かな夜
舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜

舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜
舟の灯の明かり
岸の木々の影
遠くの家々の光
静かな夜

[illegible]

口立二件のものとむかひて天皇の御とれた女御
 さまとむかひてあつたものとむかひてあつたもの
 おゐるものとむかひてあつたものとむかひてあつたもの
 といふこととあつたものとむかひてあつたもの

ちよとせりこにゆきまのち
 ようとせびたふくちうなる
 ぐひようき入内 祐市に
 九七のちうらんちうまのち
 ひさぎんちうのちうち
 ちち大士のちうちひめ
 のちうちひめ

みやとめぞうたんぢやうありなまづ二の

ふむと東宮がうたてき春の六十二の
 んど冷泉院（成徳）とまうまはけ二のまのあふ
 てうのふあふのまのあふこもふあふ
 てふあふこととふあふあふあふあふ

わひあふとてなをうけいし世をさちめつるなりくとえそ
わにたどうふ田中ふかくあかいう月をこむまきふ
わのふ御やうも一のこころはくじぐれよふあまふ
わがふあふあふ人の夢ひのこころよりん



お中へきこくちひやく九でうどのわせのはちそま
よくもわくちひやく九でうどのわせのはちそま
女師あはちひやく九でうどのわせのはちそま

あはれに東宮をうけつゝ
あはれに東宮をうけつゝ

あゝまゝに
ふりぬるを
うづあま
おんちの
なりきりて

わやあひぢぢ
あふさきかぶ
あねんととづつひちん
あひぢぢもわうてめ

父とてみこ五のちの九ツネありと申とてかみ世
 父とてみこ五のちの九ツネありと申とてかみ世

つゝのちとてさうやけえんがにこのあかぬ
ゆゑおみとなりはとてせむらうこそせよあるや
つめいとうくらくちかどあづり且つせいねいと
のちとてへありおきせぬひけりとうふらんめんを

[illegible]

田舎者
みづとふゆせ
あひまのうぬの
みづとふゆせ


寶鑑刀編

東宮とく
わいせいの
こと

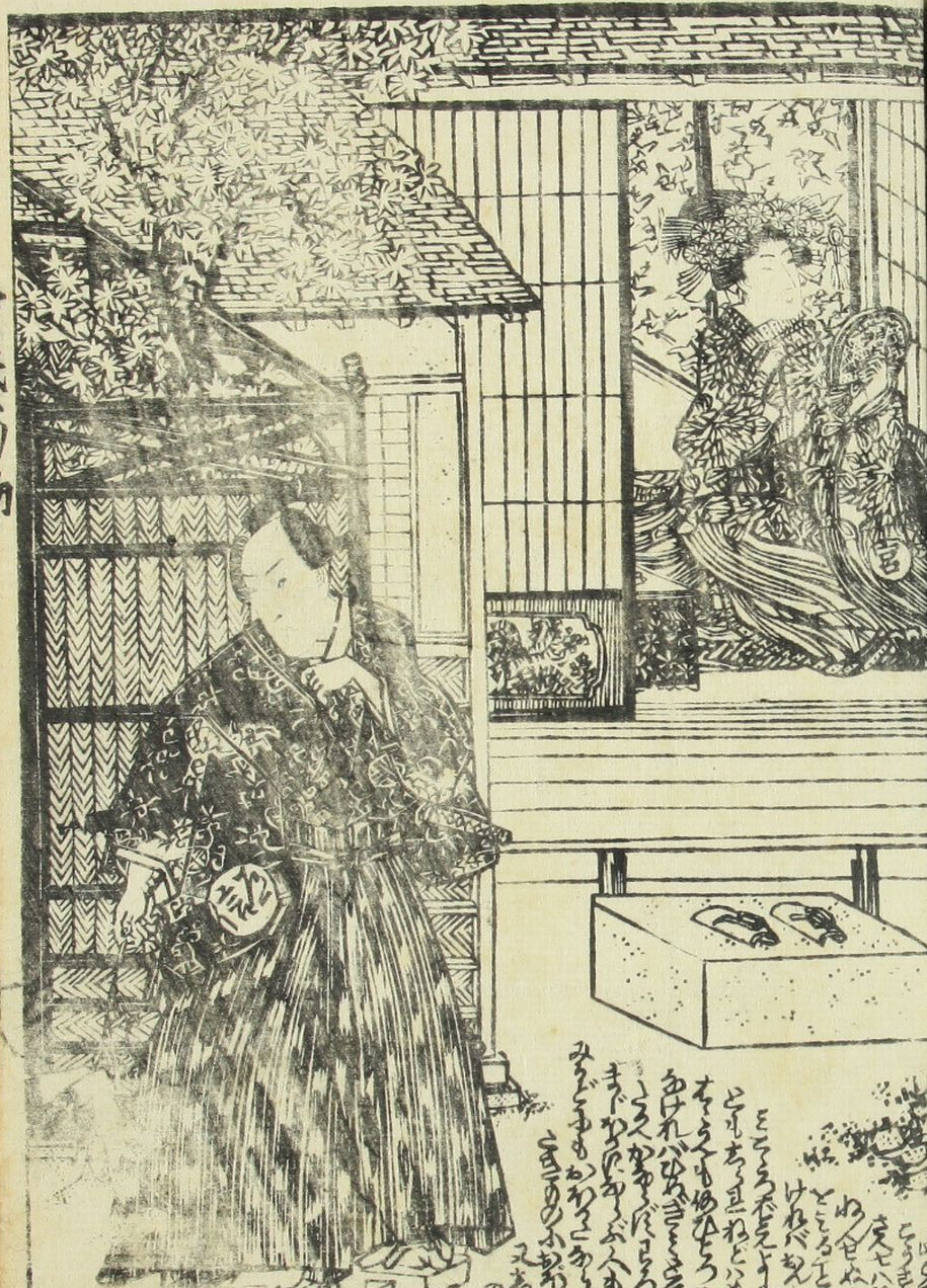
女御とみ
みちのちめ
みちのちめ

皇太子と云

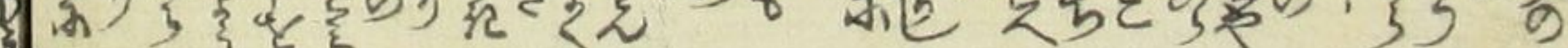
又

あんの
とぶと



[illegible]

つぎとてうづらうふ
たはるゑめあなを
ころこのかきぬ
からちりきこあろ
うてくせさう
りやちん中一
あんろのものの
ごぢやうとてや
とてうづらうふ
せあふとてか
のひねきこち
びんのきん
まわてん
いやくし
生ものお
あわれ
あゆも
まきの
みよの
かうそん
かくちや
ゆくいき
かいたる
二とうより
さくの
せいの
まの
せいの
せいの



實止初結

十九

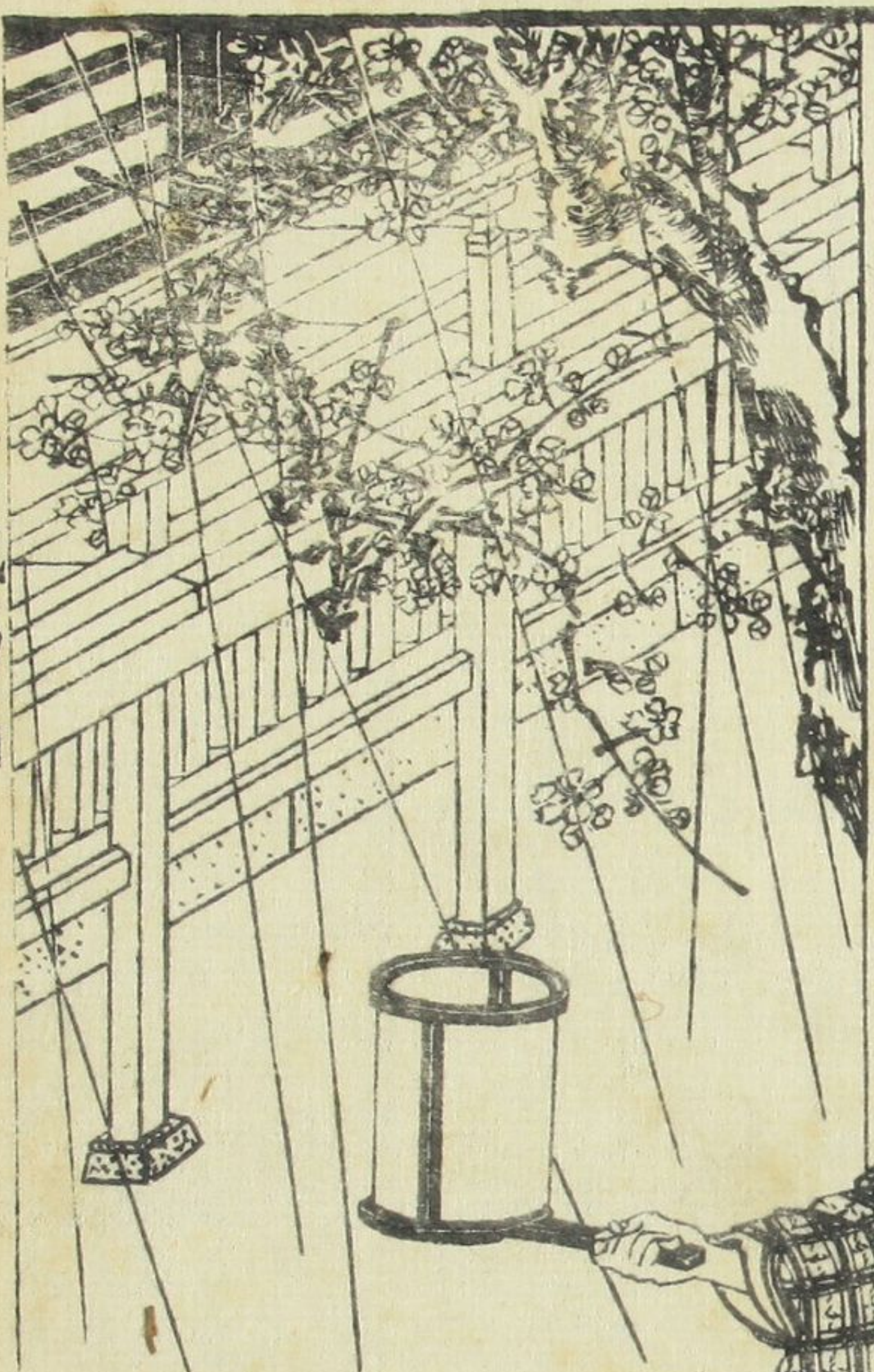
〓 ねむとのやうなるふもろそ
 かてなるやありなるゆふ
 さるあふちさうてくまうハ
 よう子ののごむうめらまどく
 やうふ人あがうあれちくふ
 くらてていかにそのぬのふと
 まふー

卷八

△ おん使のうめもさうりあ
らちかきやてやうらぬ
とらふもさるはあつ
くらせいの世のこえも
あふやうにさうり
うりやうもさる
こふもさる
むくの人のさ
まのさる

[illegible]

④ちや
 のの
 こくも
 まじふ
 けう
 ああのかを
 やまなごころを
 むらゝあきこころふ
 おくのえんかへあそくの火
 きるたどとぞをゆて
 もぢひのいづみのよこ
 とうちまはたつきのの
 らうらんこころふ
 かりたりあそぶかきこ
 づこそもしろさば
 はなつわぐいと
 わきたかの
 ゆめれこころに
 あうりの
 あたま
 つく



一陽齋豐國畫

〆のづのりやねのせうあふひが二ハ
 のびてゐるやうなふくふくした
 〆のづのりやねのせうあふひが二ハ
 のびてゐるやうなふくふくした



笠亭仙果作

まゝてあま
やくしき

娘庭訓金鷄

山東庵京山作
金鷄
初編
二編
三編
梅蝶樓國貞画

お家きん琴聲びん美人録ろく
総次郎

美人錄
十四編
十五編
十六編
立川齋國鄉画

夢想むさうびやう五衛ごゑい勤くん畧りやく枕まくら

笠亭仙果作
勘畧枕
大五編
尾
一勇齋國芳再

新增補西國奇談

爲永春水作
四國奇談
三四五編
歌川國貞
画

吉三あし松梅竹取物語

歌川國貞画

根源實紫

笠亭仙果作
系三九
歌川國貞再編

花兄弟陸奥名所

同 異名所 同
二初
禹 編編 作



芝神明前三島町角

東都地本繪草紙團扇問屋

仙果
作



二編上





丸印文庫

芝三 島街 喜鶴 堂梓

初編 在のまゝで實事なりとも興あれば虚談を加ふる然バ 此処より實紫の名ありあり其父の語とて程 上より下の あり一度も顔と出さば是枝葉の爲幹にけり 半石山寺に 杵より柄の太きに似れども趣向と餅の 始り爲時の物 つと團子十五夜月見れば又三編の 語せんとてまてハ 未幾一宣孝死して中宮に式部 跡方もなき空ぞと 奉公の顛末貞操曇らぬ婦の龜鑑 悲しむ所も更なる ぬれど其人物古書に 舊記照してあるは實と 出さる人々行状性質 録して御覧小備へん 初春の御年玉もあへく 雜史記録家集を人に問 先此編弘徽殿 やと我身ろく記して序と次 聞こわけんかくつととの推 のある軒端 嘉永元年辛亥臘月 量話其よき世継の物語此二編 乃

笠亭仙果述



實紫二編

華山院天皇

新千載集
弘徽殿女御
かゝる色はつらね
唐のあつてもきき
たきまつて

あゝ世の
人々
物と見
えや唐
おまの
そふつ
はれ

弘徽殿
女御
低子
靈魂







あんなのうしろめさうな女房が
うしろめさうな女房が
うしろめさうな女房が

女房の
うしろめさうな女房が
うしろめさうな女房が



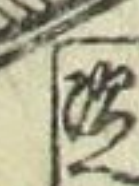
田舎の
うしろめさうな女房が
うしろめさうな女房が

實止一絢

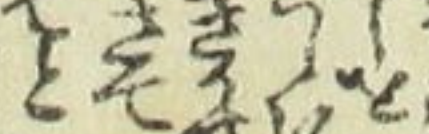


主

五、主、以、爲、



又まゝのてい
ていといふと
あつたに
ちよきやせ
あひまを
そと
あはれ
うまいけり
すべし
さるもひとく
あり、またよりよく
あはれともなれば
うまいまゝにてあは
れ



[illegible]



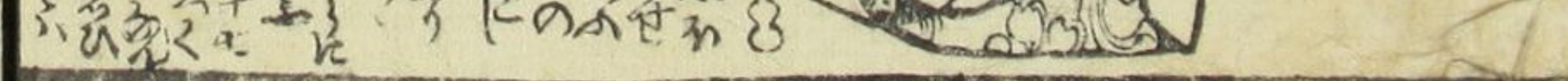
ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす
 ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす



ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす
 ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす

ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす
 ちやうどおんなのこころを
 せんせふのまへにあらわす

か女郎の
おれ
おれ
あせ
あひ
そのの
とてまに
きぬで
女御生あり
るをいつ
えなつに
ぎうあふ
えとふ十
あるはく
いふあ
つるあひ
あそふ

[illegible]



喜鶴堂主人敬白

豊
国
画



喜鶴堂壽梓



根
源

三
世

二編下



[illegible]

小糸 ありけり

[illegible]

舟のなか
 ききこへ
 かみさる
 ろろく帳子
 はの工のと
 やひつてけ
 下りぬまづ
 きこえよりつる
 日ざくらあきど
 のつるおねむい
 つ。あつのおも
 りしてありあけ
 そらむらえ
 だわ
 あつと
 のつたそ
 ととも

ふと、わたりもの
こころあるあふと
大あつたのこころ
づいぶんむねかつと
きさかりてふとれ
いふこのこころは
みだもかときさう
りし山へ下りく小
ちんねきおんのの
まなりあり又ふら
づさのこころとせ
ひるせ女御の
あまみのまぎら
べきおりのなものの
めろじきあふとも
よるひのかちをこむ
せさきともいふぬ
あつたひくのなを
ひくらでてえ上
びとらんどもと
あつたひのちあふ
あふりあけぬふと
びれくるるげあ
かわるにまれまふ
かむのいさきもあら
であらそくにあら
あふりやどあふり
あふりやどあふり
き六位あふり
あふりやどあふり

○帳子
やうび
おいて
こきでんへ
かへり
いふふ
とてふ

卷之八



あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ



あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

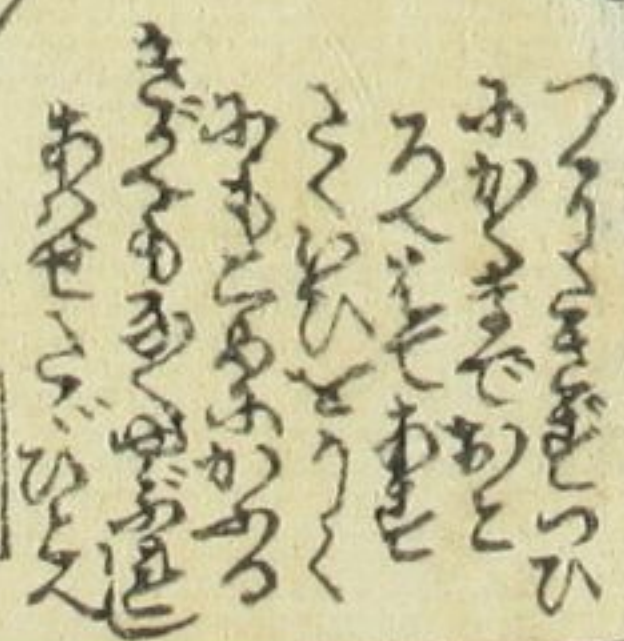
あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

あつたあけ
あつたあけ
あつたあけ

[illegible][illegible]

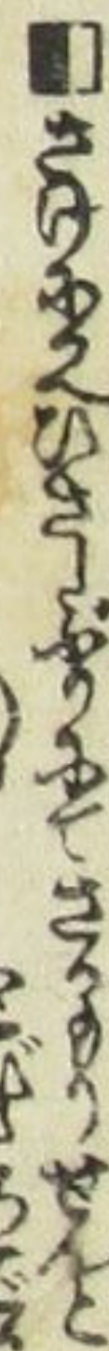
まぐくちまをけいばわらま
つまのまをとりあがらう
かわせつぐもそくわらえ
あぐばめさう
あそんどあうば
あそもらうて



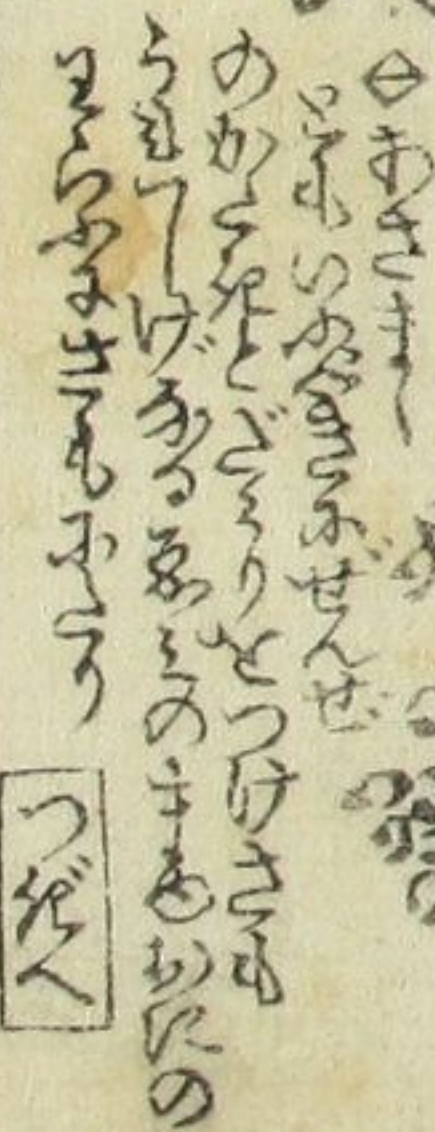
りんごの
 とくみぎやう
 ところとら
 つまふ
 あん
 こく
 さき
 るが
 やめ
 かこ
 ゆえち
 らも
 どう
 とろく
 きりか
 いと
 わうちう
 はたさへん
 たそちう
 おしとろく
 とらひきとも

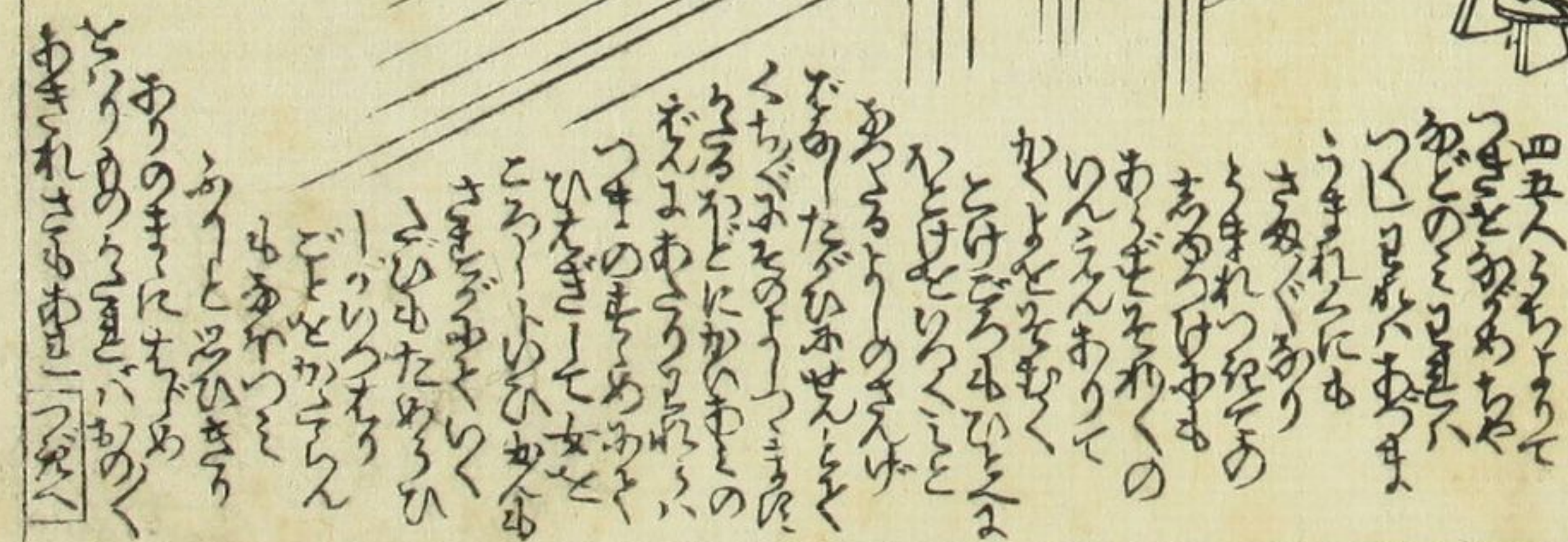


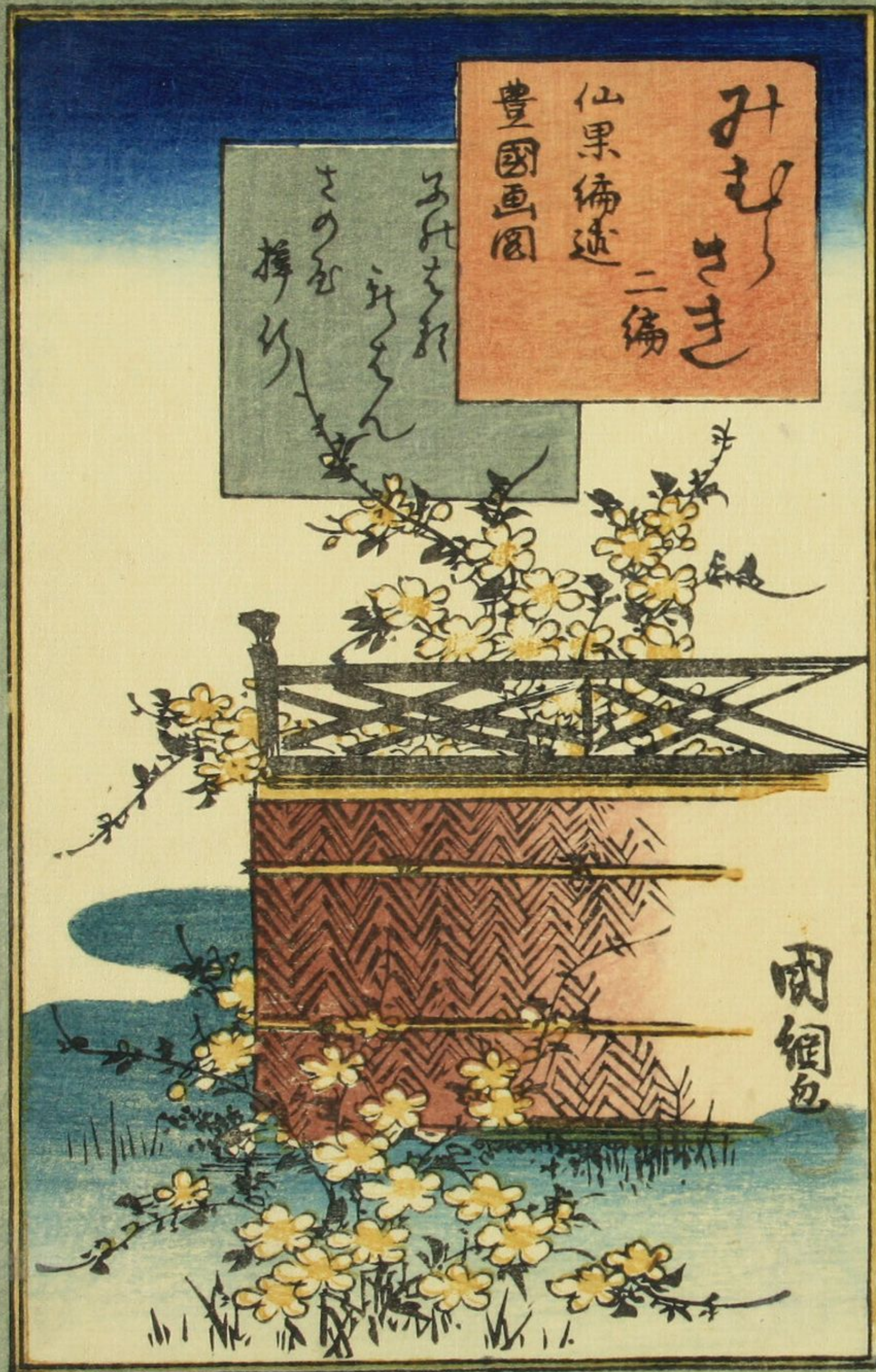
實錄卷二

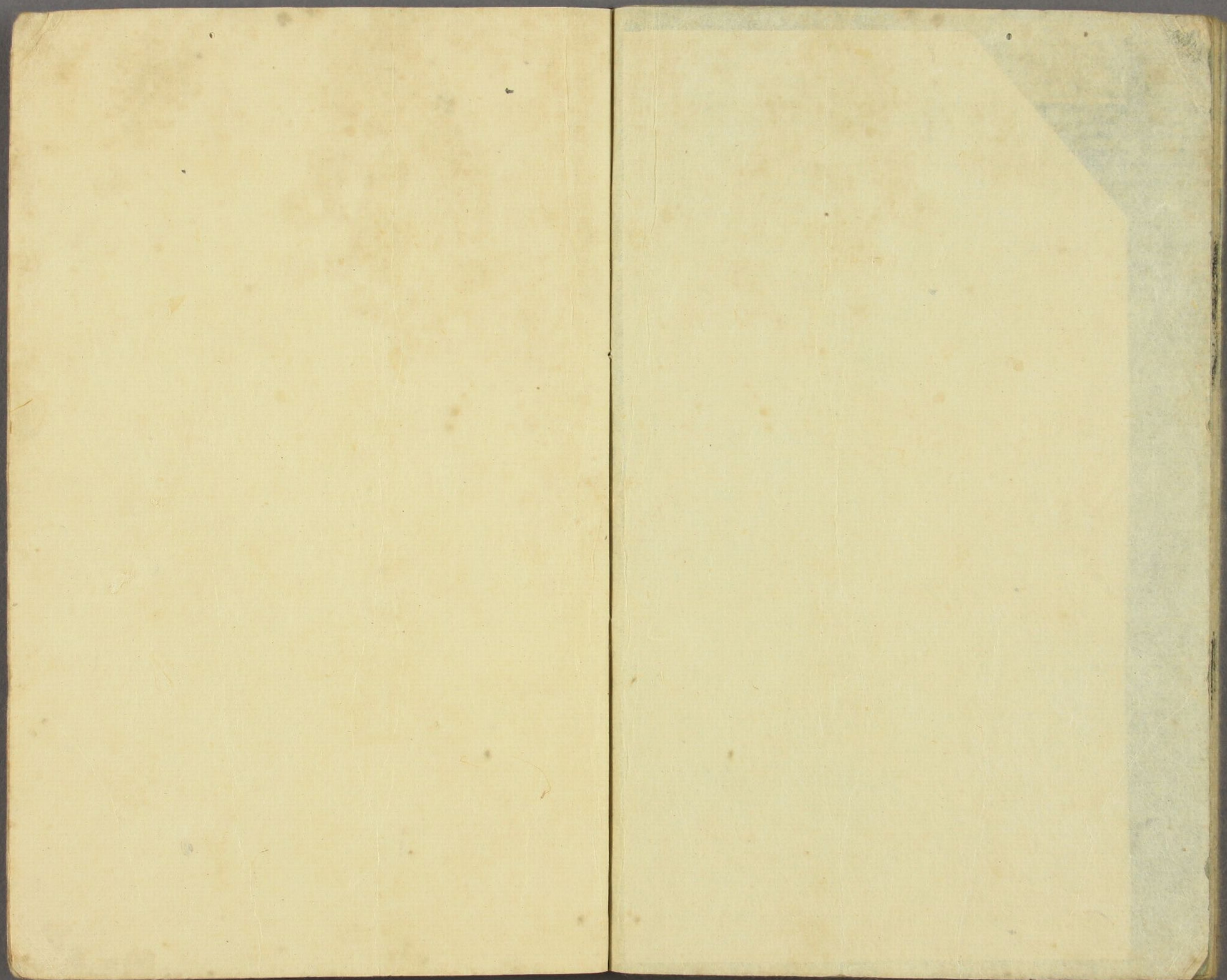


まめ
 ひなまつり
 甘きせうりしと
 あまきとくえんあ
 こし ひとふらふ
 あめふらふ
 さきふらふ
 とま









以下全て
白紙

去理下